

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720389

研究課題名(和文)階級からみるオリシャ崇拝の変容：アフリカ由来の神を崇拝するアメリカ黒人の社会運動

研究課題名(英文)Race, Class and Social Movement Struggle: The African American Orisa Worship Movement in Transition

研究代表者

小池 郁子(KOIKE, IKUKO)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：60452299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、アメリカ黒人の社会運動において、人種、階級、宗教がどのように交錯しているのかを、アフリカ由来の神々、オリシャを崇拝する運動を事例に考究することであった。より具体的には、中産階級の成員(多くを女性が占める)が、下層階級を中心に発展してきた原理主義的かつ男性覇権主義的な運動といかに関わってきたのか、また、中産階級の参入によって、宗教文化の実践や運動の実践形態がいかに変容したのかを文化人類学的視点から検討した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine race, class, and social movement struggle in the African American social activity named as the Orisa Worship movement. This study explores the way the black nationalism movement, originally engaged by patriarchal underclass males, has embraced middle class females. This research then reveals the numerous struggling experiences of the middle class practitioners played a great role of transforming the principles and polity of the racially and religiously homogeneous social campaign.

研究分野：文化人類学、アメリカ研究

キーワード：思想哲学・教育 グローバル化 社会運動 人種・民族 階級 植民地主義 ジェンダー アフリカン・ディアスポラ

### 1. 研究開始当初の背景

本研究が取り上げる「オリシャ崇拝」は、大西洋奴隷貿易によって西アフリカから移動を迫られた主にヨルバ人奴隷の宗教文化が、新世界での宗教弾圧や迫害のもとで植民者のキリスト教（カトリシズム）と混淆して形成された（Brandon 1993; Pinn 2008）。米国には、20世紀初頭から、キューバやハイチをはじめとするカリブ海域からの移民によって伝播した。

オリシャ崇拝運動は、当初、黒人としての集団的同一性を強調するあまり、原理主義的な運動を展開した。そのため、運動に参加していた少数派（中産階級、女性、「混血」による白人的身体性）は様々なかたちで抑圧された。しかしその後、一部の成員が、真正とされるナイジェリアのオリシャ崇拝の知識・技術を求めて、ナイジェリアやキューバの崇拝者と交流することで、オリシャ崇拝にみられる原理主義的な規範や価値観を変化させ、新たな宗教実践を創造している。

そこで、本研究は、現地調査をもとに以下の2点について考察した。①オリシャ崇拝運動は、少数派の中産階級をめぐってどのように変容したのか。②運動の階級（階級意識や対立、階級による崇拝形態の差異など）は、ナイジェリアやキューバのオリシャ崇拝者との文化交渉においてどのように再構築されているのか。さらに、本研究は、階級という視点からアフリカ系アメリカ人（アメリカ黒人）のオリシャ崇拝運動を捉え直すことで、原理主義的な社会運動において人種、階級、宗教が交錯する様相を明らかにし、米国社会に根づく人種主義的な実践や表象と階級がいかに関動しているのかを検討した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカ黒人の社会運動において、人種、階級、宗教がどのように交錯しているのかを、アフリカ由来の神々、オリシャを崇拝する運動を事例に考究することであった。具体的には、本研究は、オリシャ崇拝運動が、時代とともに変わりゆく成員の階級構成によって、どのように変容してきたのかを、儀礼の実践、宗教的位階、一夫多妻制、コミュニケーション（生活実践共同体）の規律、宗教上の家族組織の構造などから明らかにした。そのうえで、中産階級の成員（多くを女性が占める）が、下層階級を中心に発展してきた原理主義的かつ男性覇権主義的な運動といかに関わってきたのかを文化人類学的視点から考察した。また、中産階級の参入によって、宗教文化の実践や運動の実践形態がいかに関容したのかを分析した。

### 3. 研究の方法

本研究は、①資料文献の収集・精査、②現地調査、③成果公刊（学術発表・論文）から構成される。

資料文献の収集・精査に関しては、対象とした領域を以下に示す。【アメリカ黒人関連】社会運動、人種、階級、宗教（キリスト教、イスラム、アフリカ系宗教）、ジェンダー、若者文化。【ナイジェリア関連】オリシャ崇拝、ジェンダー、伝統、階級、宗教（キリスト教、イスラム）、社会政治、ヨルバ・ナショナリズム。【文化人類学理論、植民地主義関連】。現地調査に関しては、1、2年目に重点的に実施し、最終年度の3年目には補足的におこなった。また、研究の成果を広く公表するため、すべての年度において学術発表をおこない、その成果を論文にまとめた。

#### 4. 研究成果

本研究では、オリシャ崇拝運動（社会運動）と階級の交錯する様相、ならびにその交錯によって運動がいかに変容してきたのかを明らかにするために、家族という視点を交えて考察してきた。米国における家族とは、人種、階級、性が複雑に交錯する社会空間である。

オリシャ崇拝運動の「イレ（宗教的家組織）」に属する男性結社の活動を取り上げる。イレとは、成員個人が、米国の各地で運営する崇拝組織のことである。イレは、オリシャ崇拝運動が、排他性を帯びた集合的な運動形態を変化させた以降、運動の基軸となりつつある組織である。以下では、イレの男性結社の活動について規範的な家族を形成することに執着しないという観点から、①男らしさからの解放、②男性本位の視点という二つの側面にわけて述べる。

まず、男らしさについてみていく。イレの男性結社では、その活動をみるかぎり、規範的な家族の形成を指標として掲げている。それゆえに、男性結社では、家族の構成に、生物学的、社会的側面からみた「父」が不在であったとしても、規範から逸脱した家族とは認識されない。換言すれば、家族との同居や、家族内で父が経済的責任を果たし、家族を養うという役割は想定されていない。

つまり、男性結社では、米国の主流社会にみられる禁欲主義的価値観でもってアメリカ黒人男性を束縛することはない。禁欲主義的価値観は、米国の「自由労働イデオロギー（free labor ideology）」と密接な関係があるので、それとの関連から考えると理解しやすい。

自由労働イデオロギーとは、一例をあげれば、生産者的な男らしさを有する階層と、

生産者的な男らしさが欠如し、消費の快樂におぼれる階層への階級分化を促すものとして作用する（兼子 2008：233-237）。そして、生産者的な男らしさを有するもののみが、白人中産階級へ合流できるということになる。この自由労働イデオロギーに従えば、社会的、経済的機会が平等であるため、アメリカ黒人男性が白人中産階級に仲間入りすることができないのは、快樂に抗し、労働に価値を見いだす禁欲主義的価値観が欠如しているからだということになる。つまり、社会の不均衡は、己の努力不足が原因というわけである。

男性結社の活動では、成員は、このような禁欲主義的価値観と結びつけられた経済的能力にとらわれることはない。それゆえに、彼らは白人中産階級男性の男らしさを身につけて成功するか、快樂に溺れ脱落するかという二元論的な価値観の選択に身を委ねることからいったん留保される。

ただしこれには問題もみうけられる。男性結社の活動が、アメリカ黒人男性を規範的な家族（白人中産階級男性の男らしさ）から解放するだけでは、たとえば、男性の周囲にいる女性が現状で抱えている経済的負担、あるいは子がある場合は、子の母や、母方の祖父母の経済的、養育的負担を軽減させることはないに等しい。すなわち、白人中産階級男性の男らしさから解放するだけでは、過去から現在に至るまでの社会制度の帰結として、社会的、経済的領域にみられる人種主義的不平等を、社会の構造問題として問うことは難しい。だからこそ、男性結社の「地域社会の父」構想が目指す教育が相互補完的に必要とされているのである。

つづいて、男性本位の視点について取

り上げる。男性結社の活動の目的は、地域社会にアメリカ黒人の社会空間を創造することである。ただし、男性結社であるゆえに当然かもしれないが、どちらかという、女性の空間というよりは、男性の空間を創ることに主眼がおかれている。同じく、中産階級というよりは、下層階級の空間を創造することが重視されている。

「地域社会の父」構想で取り上げた警察への対処法は、まさにその典型に映る。地域社会の父構想の目的の一つは、「逮捕、収監」、「地域社会からの離脱」、「酒・薬物依存」という人生の悪循環から、男性が脱出できるよう支援することである。そのために、不当に行使される警察権力から身を守るフッド（アメリカ黒人の集住地区）の知恵を他者と共有し、次の世代に伝授する必要性を強調する。むろん、女性や下層階級に属さない人々も、不当な理由を契機とした逮捕、収監を経験し、結果として地域社会から離脱することもある。また、男性が先に述べたような悪循環から逃れることで、地域社会という社会空間を共有する人々への影響も変わってくるであろう。したがって、地域社会の父構想は、その表層的な理解から想像してしまうような男性や下層階級のみを対象とした活動とはいえない。

ただし、地域社会の父構想には、米国の主流社会との境界を強調しかねないという側面もある。すなわち、米国社会を支配と従属の二元論で捉える傾向である。また、あえて言うならば、男性同士の関係構築に重きがおかれている。このようなことから、地域社会の父構想に、家父長的、男性覇権主義的な価値観が培われるようになったり、あるいは、男性結社の活動が、「地域社会の父」という概念を巧妙に利用して、規範的家族の拡大版として機能したりする

おそれもある。

しかしながら、次の理由から、かつての均質的、集合的な運動の実践やほかの時代の社会運動にみられた家父長的、男性覇権主義的な価値観は影を潜めている。その理由とは、男性結社は、将来的には男女の成員を迎える「若者結社」として運営したいという希望とともに、性別を問わず地域社会に開かれた活動を目指しているということ。また、男性結社の活動の準備作業に、少ないながらも女性成員が関与しているということである。そしてなによりも、イレには宗教的位階の高い（司祭として活動している）女性成員がおり、彼女たちの存在が一定の抑止力として機能しているからである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

### 小池郁子

「社会運動と軍事的性格——アフリカ系アメリカ人の社会運動における男性覇権主義の変化」『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊』第 1 巻、2008-2011 年度科学研究費補助金基盤研究（B）アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究、査読無、222-240 頁、2013年。

### 小池郁子

「アフリカ系アメリカ人の地域社会と家族——宗教的家族組織の形成からみるオリシャ崇拜運動」『シングルがつなぐ縁——シングルの人類学』第 2 巻、査読無、249-273 頁、人文書院、2014年。

小池郁子

「社会運動を変容させる「女神」——オリシャとともに生きるアフリカ系アメリカ人」『季刊民族学 特集 女神』第 149 号、査読無、62-68 頁、2014年。

小池郁子

「アフリカ系アメリカ人の社会運動にみる軍事的性格——暴力、男らしさ、黒人性」『軍隊の文化人類学』査読無、247-283 頁、風響社、2015年。

〔学会発表〕（計 5 件）

小池郁子

「アフリカ系アメリカ人の負の歴史とオリシャ崇拝運動——奴隷という「経験」」第 46 回文化人類学会研究大会、2012. 6. 23、広島大学（広島県）

小池郁子

「黒人運動にみる宗教的家族組織の形成——米国のオリシャ崇拝より」日本宗教学会第 71 回学術大会、2012. 9. 9、皇學館大学（三重県）

小池郁子

「宗教的家族組織の形成からみるオリシャ崇拝運動——アフリカ系アメリカ人の地域社会と家族」第 47 回文化人類学会研究大会、2013. 6. 8、慶応大学（東京都）

小池郁子

「オリシャ崇拝と「奴隷」——アメリカ黒人の社会運動をめぐって」日本宗教学会第 72 回学術大会、2013. 9. 7、國學院大學（東京都）

小池郁子

「オリシャ崇拝と「性別」——アメリカ黒人の宗教運動の変容」日本宗教学会第 73 回学術大会、2014. 9. 14、同志社大学（京都府）

〔図書〕（計 1 件）

小池郁子

『コンタクト・ゾーンの人文学——宗教実践』第 3 巻、田中雅一・小池郁子編、全 302 頁、晃洋書房、2012年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小池 郁子（KOIKE, IKUKO）

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：60452299